

施設いちごのIPM実践指標モデル

次の管理項目や管理ポイントを例にして、地域の病害虫や雑草の防除状況に応じたモデルをつくりIPMに取り組みましょう。

管理項目	管理ポイント	取り組みの ○×チェック	
		去年は？	今年は？
育苗期の管理	育苗に用いる培土や資材は、病害虫に汚染されていない清潔なものを使用する。		
	親株は信頼できる経路から入手した、病害虫の感染・寄生がない株を使用し、毎年更新する。		
	雨よけ栽培の育苗施設では頭上灌水を避け、立枯性病害（炭そ病、疫病）の感染拡大防止を図る。		
	ハダニやうどんこ病等を本ぽに持ち込まないようにするため、育苗期の防除を徹底する。		
病害虫が発生しにくい環境づくり	ほ場の排水対策に留意し、水はけを良好に保つ。		
	土壌診断を行い、適正な施肥を行うことで健全な作物育成を行う。特に急激な肥効、肥料切れは発病を助長するので、品種の特性及び生育に応じた適正な施肥量を守る。		
	施設内が高湿・多湿にならないように、適正な灌水と適切な換気を行う。		
農薬の適正な使用	使用する農薬の系統を確認し、同じ系統の薬剤の連続使用を避ける。		
	指導機関から病害虫の薬剤抵抗性の発達状況に関する最新の情報を入手し、薬剤を選択する。		
	ミツバチ等の授粉昆虫に影響の少ない薬剤を選択する。		
	粒剤や苗灌注処理剤等を活用し、少量の薬剤で効率的な防除を行う。		
	薬剤散布は下葉かき作業後に行うなど、病害虫の発生部位に薬剤が十分かかるようにする。		
	薬剤散布の際は、施設を一時的に閉めるなど、適切な飛散防止措置を講じる。		

管理項目	管理ポイント	取り組みの ○×チェック	
		昨年は？	今年は？
防除要否の判断	施設内を見回るとともに、粘着シート等を利用して病害虫の発生状況を把握する。また、次年度での参考情報とするため、その結果を記録する。		
	病害虫防除所が発表する発生予察情報を入手し、病害虫の発生予測を確認する。		
物理的防除の導入	太陽熱消毒を実施し、土壌中の病害虫の密度低下を図る。		
	病害虫の発生がみられた株や、収穫残渣等は早期に除去して施設から離れた場所に埋設するなど、感染源にならないように適切に処分する		
	ハダニ対策には、気門封鎖剤などの物理的防除剤を積極的に活用する。		
生物的防除の導入	カブリダニ製剤などの生物農薬を使用し、抵抗性発達防止に取り組む。		
	天敵類に影響の小さい農薬を選択する。		
計画と記録	栽培開始前に、年間の具体的な病害虫防除計画を作成する。		
	病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法などの栽培管理状況を記録する。		
研修会への参加	県や農協などが開催する講習会に参加して、IPMや農薬安全使用に関する情報収集を行う。		